

# 甦る *Adventures of Huckleberry Finn*

## —“the raft episode” の復元—

那 須 頼 雅

Mark Twain の作品の中で一番多く読まれ、最も高い評価を獲得してきた *Adventures of Huckleberry Finn* にその発刊100周年を機に、重大な補正が施された。それはただ一人の編者の場合を除き、削除されてきた、いわゆる“the raft episode”<sup>1</sup> が作者 Twain のそもそもの意向だったとして、第16章第2パラグラフの後の元の箇所<sup>2</sup>に復元された<sup>2</sup>ことを指している。

この復元はたかだか17頁くらいの“the raft episode”が加えられるだけのことと軽く見過せない。というのは、この“the raft episode”が *Huckleberry Finn* という作品を正しく理解する上で極めて重要な要素であるからだ。しかしその反面、作者 Twain が当時の心情・事情はどうであれ、目らの責任で“the raft episode”の剔出を決め、その初版の発行に踏み切ったわけだから、それを勝手に復元することは剽竊もしくは改竄になりかねないという慎重論もある<sup>3</sup>。

この小論の目的は、Twain が全く不本意に“the raft episode”を剔出したという事情を重くみて、“the raft episode”は復元すべきだとする側に立ち、この episode が *Huckleberry Finn* から剔出されるに至った経過、そして、この episode の内容と構造、最後にこの復元で *Huckleberry Finn* の作品理解にどのようなメリットを与えるか、などを明らかにすることである。

の経緯<sup>4</sup>は次の通りで、しごく単純明快である。

“the raft episode” は *Huckleberry Finn* の1876年の草稿に収まっていた。それを Twain は *Life on the Mississippi* (1883) 第3章 “Frescoes from the Past”, 第6パラグラフの後に恰好のものだとして流用した。実は *Life on the Mississippi* の頁数を増やそうと躍起になり、困り果てた拳句、Twain が突差に思い付いてのことだった。*Life on the Mississippi* 第3章、第6パラグラフはこう終る。

I remember the annual processions of mighty rafts that used to glide by Hannibal when I was a boy—an acre or so of white, sweet-smelling boards in each raft, a crew of two dozen men or more, three or four wigwams scattered about the raft's vast level space for storm-quarters—and I remember the rude ways and the tremendous talk of their big crews, the ex-keelboatmen and their admiringly patterning successors; for we used to swim out a quarter or a third of a mile and get on these rafts and have a ride.<sup>5</sup>

ここまで書き進めてきた Twain は折々に書き溜めてきた *Huckleberry Finn* 未完成原稿の一部 “the raft episode” をこの後に「接ぎ木」すれば、あの当時の “keelboat talk and manners, and that now-departed and hardly-remembered raft-life”<sup>6</sup> をより鮮明に読者に伝えることができると判断したのだが、そこはいかにも Twain らしい所、“the raft episode” のことを一言も読者に断わらずに、*Life on the Mississippi* に流用するということはできなかつた。“the raft episode” をここに入れるという断り書きから始めて、その出所である *Huckleberry Finn* とはどれくらいの間、どのように書き進められ、概ねどのような内容の物語であるかに至るまで読者に説明することを忘れてはいない。

I will throw in, in this place, a chapter from a book which I have

been working at, by fits and starts, during the past five or six years, and may possibly finish in the course of five or six more. The book is a story which details some passages in the life of an ignorant village boy, Huck Finn, son of the town drunkard of my time out west, there. He has run away from his persecuting father, and from a persecuting good widow who wishes to make a nice, truth-telling, respectable boy of him; and with him a slave of the widow's has also escaped. They have found a fragment of a lumber raft (it is high water and dead summer time), and are floating down the river by night, and hiding in the willows by day,—bound for Cairo,—whence the negro will seek freedom in the heart of the free States. But in a fog, they pass Cairo without knowing it. By and by they begin to suspect the truth, and Huck Finn is persuaded to end the dismal suspense by swimming down to a huge raft which they have seen in the distance ahead of them, creeping aboard under cover of the darkness, and gathering the needed information by eavesdropping.<sup>7</sup>

それから1年後の1884年4月, Twain はようやく *Huckleberry Finn* の完成にこぎつけ, “the raft episode” を含む完成原稿を彼の甥で, 彼の作品の編集責任者 Charles L. Webster のもとに送った。それに対する Webster の4月21日付の返事が次の引用である。

“Mr. Howells wanted me to ask you if he was to have a carte-blanche in making those corrections, the book is *so much* larger than Tom Sawyer would in [it] not be better to omit that old Mississippi matter? I think it would improve it.”<sup>8</sup>

翌4月22日にそれに答えて Twain は Webster に折り返し, 次の手紙を書き送った。

“Yes, I think the raft chapter can be left wholly out, by heaving in a paragraph to say Huck visited the raft to find out how far it might be to Cairo, but got no satisfaction. Even *this* is not necessary unless that raft-visit is referred to later in the book. I think it is, but am not certain.”<sup>9</sup>

これら2通の手紙から判断する限りでは、たしかに Peter G. Beidler が認める通り、“the raft episode” を削除するよう Twain に働きかけたのは Webster である。そして、その勧めにただ Twain は応じたにすぎない。ここでの Webster のねらいは、当時の上流家庭の客間の書棚に *Tom Sawyer* の姉妹作品として *Huckleberry Finn* が飾り立てられるには、これら2書の部厚さがちぐはぐであってはならない。そこで *Tom Sawyer* とほぼ同じくらいの頁数に押さえないというものであった。要するに、Webster の主たる関心は、「読まれる本」としての *Huckleberry Finn* より、「飾られる本」としての *Huckleberry Finn* の方に向いていたと言っても言い過ぎではなからう。かと言って Beidler の断言するごとく、この“the raft episode” 剔出の責めを一方向的に Webster にのみ被せるのは不当であろう。なぜなら、これらの手紙のやりとりの前に、Twain は、新書 *Huckleberry Finn* の予約部数が少なくとも4万部に達しなければ出版に踏み切ってはならない旨、厳しく Webster に指示していた<sup>10</sup>からである。いや、それどころか Twain は1年前、*Life on the Mississippi* で使った使い古しの“the raft episode” を新書 *Huckleberry Finn* に入れたままに出版すると、予約部数の伸びにひびくのではないかを恐れ、Webster に特にそのことで手紙を書き、“the raft episode” を *Huckleberry Finn* 予約を煽る近刊宣伝文の中に含めないように、“Be particular and don't get any of that *old* matter into your canvassing book —(the raft episode.)”<sup>11</sup> という注文まで付けているからである。

以上の経緯からすると、印刷開始寸前にあった *Huckleberry Finn* 原稿から“the raft episode” を外して初版に踏み切った責任は、作者 Twain と出

版責任者 Charles L. Webster の両方にあることは明白である。要するに Twain は “the raft episode” を、*Life on the Mississippi* の場合は “嵩” を増やそうとして急遽つかい、そして *Huckleberry Finn* の場合はその逆に “嵩” を減らすようにせがまれ急遽つかわないことにしたことになる。

それから半世紀後の1942年、Bernard DeVoto が Limited Editions Club から *Huckleberry Finn* を出すことになり、新機軸を打ち出そうと、その中に敢然と “the raft episode” を復元し、出版した<sup>12</sup>。DeVoto は1946年にさらに *The Portable Mark Twain*<sup>13</sup> を出すが、その中の *Huckleberry Finn* にも同様に “the raft episode” を復元した。この DeVoto の快挙もしかし、後が つづかなかった。この後、次々に *Huckleberry Finn* は編まれるのだが、“the raft episode” は完全に省かれるか、または、巻末に Appendix として添えられるか、にとどまった。各編集者は多かれ少なかれ、隠然たる勢力をもつ “purists”，それに加えて、自称「Mark Twain 心酔者たち」からの激しい怒りと反発を恐れたからに他ならない。

## 2

ではこれから、この “the raft episode” とは一体どういう内容の物語なのか？の問題に移ろう。

この episode は Huck が Jim の晴れて自由の身になりたいという切なる気持を汲み、自由州への門として重要な河岸の町カイロの所在をたしかめにミシシッピ河上に浮かぶ大筏に潜入する条りである。これについて作者 Twain は “Huck visited the raft to find out how far it might be to Cairo, but got no satisfaction.”<sup>14</sup> と要約する。たしかにカイロ所在の聞き出しの目的は果たせず Huck は空しく筏にもどるのだが、実はその代りとして Huck は他では得られない見聞をする。それは一口に言えば “baby & barrel”<sup>15</sup> という Huck にとって他人事とは思えない物語を直接聞いたことである。それは Ed という名の男の語る、次の幽霊樽の話である。

Dick Allbright には Charles William Allbright という男の子がいた。ある夜、この子が泣きわめくので、思わずかっとなり、締め殺してしまった。妻にも内緒にその遺体を始末し、樽詰めにし、ミシシッピ河に流した。その後、筏乗りの河男になった。ところが、それから3年間、この遺児の棺樽がこの河の流れのまにまに漂い、Dick の乗り込んだ筏に付きまとして、離れない。挙句、筏乗り仲間達にも様々な恐ろしい祟りを及ぼすようになる。それまで威勢のよかった河男たちもみな異常な恐怖に襲われる。遂に筏運送の仕事にも支障が出始めた。その時、勇敢な親方が、自ら河にとび込み、その大樽を自らの手で引き上げ、中を調べたところ、裸の嬰兒の死体が現れた。Dick はそこで、即座に、それは吾が子で、自分の手で締め殺したことを皆に告白する。それを聞き、皆が Dick をリンチにかけようとする。その気配を感じるや Dick はさっと身を翻し、吾が子の遺体をかき抱き、その遺体もろ共、河に身を投げる。それっきりで、この父子の姿は水面に現れることはなかった。これがこの話の荒筋である。

### 3

この Dick Allbright の幽霊樽物語がただ大筏での河男たちの無聊を慰めるための小話に過ぎないどころか、*Huckleberry Finn* 全体のテーマに関わる重要な要素であることを暗に示すため、作者 Twain は、“the raft episode” の冒頭部に、次の folk-ballad を掲げている。

“There was a woman in our towdn,  
 In our towdn did dwed'l,  
 She loved her husband dear-i-lee,  
 But another man twyste as wed'l.

Singing too, riloo, riloo, riloo,  
 Ri-too, riloo, rilay . . . e,

She loved her husband dear-i-lee,  
But another man twyste as wed'l."<sup>16</sup>

これはそもそもスコットランドの folk-ballad で、初めの2スタンザである。これには10以上の名称<sup>17</sup>がある。しかし、その中でこの内容を最も具体的に表わすものとして、“A Cruel Wife”が一番適切な名称と言えよう。このスタンザの後、次の7スタンザが続く。

*She went down to the doctor's shop  
To see what she could find  
To see if she could find anything  
To make her old man blind.*

*She found six dozen old beef bones  
And made him chew them all.  
He says, "Old woman, I am so blind  
I can't see you at all."*

*He says, "Old woman, I'll drown myself  
If I could find the way."  
She says, "My dearest husband,  
I'll go show you the way."*

*She took him by the hand  
And led him to the brim.  
He says, "Old Woman, I'll drown myself  
If you will push me in."*

*The old woman stepped a little one side  
To give a sounding spring.  
The old man stepped a little one side,  
And she went bounding in.*

*Then she bawled out, she squawled out,  
As loud she could bawl.  
He says, “Old woman, I am so blind  
I can't see you at all.”*

*The old man being good-natured  
And thought that she might swim,  
He goes and gets a good long pole  
And pushed her further in.<sup>18</sup>*

この老夫婦の醜い葛藤は先ず老妻に間男ができ、その邪愛で目がくらみ、老いた夫を“six dozen old beef bones”で盲にし、河に突き落とし溺死させようと企む。が夫の方が事前に感付き、とっさに体を躲して、妻の裏をかき溺死させるといった内容である。

この歌の締め括りとして、次のようなスタンザが付く。

*Now my song is ended,  
I'll sing you no more.  
Wasn't she an old fool?  
And he was seventy-four.*

*Now my song is ended,  
I'll sing you no more.  
Wasn't she an old fool  
To trust her husband so?<sup>19</sup>*

この“A Cruel Wife”の骨子は、先の“Cruelty to Charles William Allbright”のと同じである。この執拗な繰り返しで、当時の白人の大人の cruelty を強く浮き立たせた物語が“the raft episode”だと言うことができる。年とった夫を盲にして、逃げも隠れも刃向いもできないようにして河に投げ込む話を序奏部として前に置き、その後直ぐ、泣くことしかできない赤ん坊を

締め殺して河に投げ込む話を置いて、白人の大人の cruelty がいかにおぞましく、極悪非道なものであるか、二重写しにして、読者に強く迫るように組立てられている。

## 4

この簡単な紹介では、“the raft episode”とはこれだけでまとなり、完結し、*Huckleberry Finn* の全体とはさして関係のない独立した一つの物語のように聞こえるかもしれない。しかし作者 Twain は一見そのような感じを読者に与えながら、実は巧みに、この樽話の Charles William Allbright と「砂糖大樽」に住む Huck とを連結する。

先に触れたように Huck は自分たちがカイロからどれくらいの所に来ているのか聞き出そうとして大筏にこっそり忍び込み、その大筏の片隅に身を潜めて聞く Ed の “Cruelty to his son” の話がそのまま Huck の受難の話、つまり *Huckleberry Finn* での Pap の “Cruelty to his son” 縮小版となっている。この設定は Twain ならではの見事なものである。つまり、Ed の話を聞き終わったところで Huck は河男たちに素っ裸の姿で見つかってしまい、リンチに遭いかけるなど恐い目に会うが、名前を言えとすぐまれた時、矢庭に Huck の口をついて出るのが、“Charles William Allbright, sir.” である。この humorous な Huck の偽称を聞くと、さしもの荒くれ河男たちも一斉に笑いくずれる。その時 Huck は思わずほっとして、こう呟く。“I was mighty glad I said that, because maybe laughing would get them in a better humor.”<sup>20</sup>

ここで作者 Twain は、Kenneth S. Lynn が鋭く見抜いている<sup>21</sup> ように、さり気なく “joke” と見せかけて、実は極めて serious な事実、“Cruelty to Charles William Allbright” はそのまま “Cruelty to Huck Finn” の縮版に他ならないことを読者に気付かせるのだ。この見事な Twain の手口について Lynn は次のように述べている。

“Always in Twain the best jokes reveal the profoundest connections, and with the release of laughter triggered by this superbly timed response we are made aware that we have been eavesdropping on a parable about Huck Finn’s life.”<sup>22</sup>

こうして Ed の語る “baby & barrel” という “fiction” は、Huck 自らが体験する “boy & Pap’s cabin” という “fact” に増幅されて *Huckleberry Finn* 読者に訴えかける。つまり、『旧約聖書』の Moses<sup>23</sup> の時よりこのかた、基本的な大人像は毫も変わっていないという告発である。本来、子供を庇護し自らの命に代えても子供を危険から守るべき大人が、その当然の責任を果たさないばかりか、大人同志の喧嘩に明け暮れ、あげくは逃げも隠れも刃向いもできない子供にまで暴力をふるい、子殺しにまではしる。この聞くも忌まわしい大人像が19世紀になっても少しも変わっていないというのである。要するに、大人の “Cruelty to Children” が深刻化し、「子供が大人になれない。夭折の他に道はない」という最悪の地獄絵図を Twain が彼なりに作品化したのが *Huckleberry Finn* であると言することができるのだ。Tom について Twain が Howells への手紙の中で、“I . . . didn’t take the chap beyond boyhood.”<sup>24</sup> と書いたし、また彼には大人になった Huck を想像しえなかったことを別の所で告白している。この事は当時の目に余る “Child Neglect”, “Cruelty to Children” 故の「子供が大人になれない」残酷・非道さを読者の大人に突き付けようと思図した言葉とも受け取れるのだ。さらにまた Twain は *Notebook* の中で “I have never written a book for boys; I write for grown-ups who have *been* boys.”<sup>25</sup> と、それから25年後にもまた執拗に断っていることは、「子供が大人になれない」つまり、「立派に成長するまでに大人が子供を殺してしまう」ということを、世の大人たちに特に読み取らせたかったことを示している。

Lynn は “the raft episode” を特に重要視して “an episode of extraordinary richness, of great beauty and humor, which takes us to the heart of the novel”<sup>26</sup> であると評価する。ここでこの “the raft episode” 重視の立場に立って、*Huckleberry Finn* をいま一度見直してみると、かつては殆んど反論の余地がないかみえていた *Huckleberry Finn* 批評の幾つかの定説にすら、明白な欠陥があることに気付く筈である。例えば、その一つとして、従来ともすれば批評家の間で slavery という社会のたった一つの制度に見られる白人の cruelty に注目しすぎ、それよりもっと大きく基本的な白人全般の cruelty, persecution にまで問題意識を広げて論じられなかった点がある。Twain 自身が、*Life on the Mississippi* での先の断り書きで、Huck のことを “an ignorant village boy, Huck Finn, son of the town drunkard of my time out west” と紹介し、Huck の St. Petersburg からの脱出について、 “He has run away from his persecuting father, and from a persecuting good widow who wishes to make a nice, truth-telling, respectable boy of him”<sup>27</sup> と要約している。この言葉からすると、Huck は本来、St. Petersburg という社会、いわば “House of Death” の中に閉じ込められ、そこで心身両面に加えられる persecution に音をあげ、出奔する “a little derelict” である。従って、Huck の最大の念願 “to go somewheres”<sup>28</sup> とは言うまでもなく、「白人の大人の cruelty, persecution の及ばない所まで逃げのびたい」という意味である。

Lynn はまた *Huckleberry Finn* の第1章の表題 “I Discover Moses and the Bulrushers” に特に注目して、次のように述べる。

the humorous introduction of the Biblical saga at the very start of the book effectively ushers in the majestic theme of slavery and freedom, and inextricably associates Huck—a native of the

river valley which its most famous citizen, Abraham Lincoln, called the “Egypt of the West”—with the little Jewish child who, abandoned in a great, continental river, grew up to lead an enslaved people to freedom.<sup>29</sup>

ここで Lynn は Huck の身の上を幼児 Moses の身の上と重ね合わせ、大河に棄てられた寄る辺ない小さな棄て子という共通点を指摘している。この面での一致は当然, “to lead an enslaved people to freedom” の面で一致するとして Lynn は論を進める。しかし, Huck には, それほど大それた力などはなく, たった一人の Jim さえも自由の身にするには, Huck の力の及ぶ所ではなかった。実際, Tom の力をも超えていた。Jim の女主人 Miss Watson の遺言書によるしか, その実現の道はなかった。この Huck にできることはと言えば, 完全な起居寝食一切を含め, 奴隷 Jim と四六時中, 平等な生活を享受すること, 大人達の目に property・money としか写らなかつた逃亡奴隷 Jim に, 真の “father” イメージを見出すこと, といった当時の白人社会では全く考えられない「奇行」を, 大人の読者に突きつけるという消極的反抗を示すことだけだった。ただ, この Huck の “showing off” が威力を発揮する。父 Dick にたえず付きまとい, 相棒の河男たちをも巻き添えにして, 死の恐怖をなめさせる幽霊樽の Charles William Allbright と同様, Huck は逃亡奴隷狩りの男に, Huck一流の “white lie” の力で, 同じ死の恐怖を味わせる。この Huck の一面は, Pap が “derilium tremens” でのう言まじりに Huck に投げつける呼称, “Angel of Death” に示される。この時, 束の間, Pap と Huck の立場は逆転してしまう。Pap は恐怖のどん底に突き落とされ, Huck は “Angel of Death” にのし上がる。Pap は必死の形相で逃げまどう醜態を見せる。やがて, ここでの死の恐怖は Pap にとって現実のものとなり, “House of Death” の中で他殺死体となって発見される。そして, Pap とは別の, 精神的 persecution を Huck に加えた Miss Watson も死ぬ。これら2人の persecutors の死で, Huck

の“Angel of Death”としての役割りは完了するのだ。

主人公 Huck のもつ重要な面は、2つある。その一つは、白人社会の persecution, cruelty に苛まれ殺される薄倅な棄児の面であり、他の一つは、Last Judgement を下す God<sup>30</sup>さながらに、加害者の白人の大人に死の恐怖を与える“Angel of Death”の面である。この“Angel of Death”と“Charles William Allbright”との両面をもつ Huck のイメージをわれわれ読者に鮮明に印象づけ、*Huckleberry Finn* 全体の理解を十全に深めさせる上で、“the raft episode”のメリットは確かに大きいと言える。

## 6

およそ文学はその時代の所産であり、文学の発生にはそれなりの事情がある。周知の通り、Twain は *Huckleberry Finn* の創作に7年以上の年月をかけ、“by fits and starts”での筆運びで書き進めていった。Howells への手紙で、“(I) may possibly pigeonhole or burn the ms. when it is done.”<sup>31</sup>と Twain が洩らしたように、作者自身の手で葬られたかもしれなかった。こういう作者側の事情と共に、当時の社会にはまたそれなりの事情があった。それは、Linda Gordon<sup>32</sup>によって明らかにされた“Cruelty to Children”, “Child Neglect”の問題の発生である。

1878年、MSPCC (Massachusetts Society for the Prevention of Cruelty to Children) が結成された。これに呼応し、全米の34箇所に、これと同種の施設が誕生した。この“Cruelty to Children”問題への取り組みは、それより36年前の1642年、植民地時代から始ったが、1870年代になって俄然“Cruelty to Children”の事件が激増したというのだ。この Gordon の研究の中で特にわれわれの注目を引くのは、“Child Neglect”は“single mothers”による場合が多く、“Cruelty to Children”は“single fathers”の場合に多発するということだ。その場合の理由が、Pap の場合と同じで、過度の飲酒があげられている点は見逃せまい。

要するに Twain が *Tom Sawyer* を書き上げ、ほっとする間もなく、*Huckleberry Finn* 執筆に取りかかったといわれる1875年からほぼ7年間の創作期間はちょうど“Cruelty to Children”が大きく社会問題化してきた時期に当たっている。

ただし、*Huckleberry Finn* 創作の面で、作者 Twain がこの“Cruelty to Children”問題に異常に強く引かれた理由を、Twain の“外”に求めるだけではなく、同時に Twain の“内”にも求める必要があるのだ。と言うのは、Twain の無二の友であり、師であった Howells にだけ告白した長男 Langdon 天死の秘事がある<sup>33</sup>からだ。これは、彼の愛妻 Olivia との間に初めて授かった男の子 Langdon が自分の全くの不注意で死んだとして、“Yes, I killed him.”<sup>34</sup>の自責・痛痕の念を Twain は Howells に書かずにいらなかった事件である。Langdon は生まれつき虚弱であったがため、この男の子の健康には特に細かい心遣いがなされた。父親 Twain はこの子を部屋の中に閉じ込めすぎると判断し、十分念入りに Langdon の体を部厚い毛布に包み、馬車での遠出に出掛けた。ところがその途中、Twain はついいつもの“reverie”に落ち入って、われを忘れていた内に、その掛けていた毛布がずり落ち、Langdon は寒風にさらされるままになっていた。馭者がそれに最初に気づき、あわてて家に連れ帰ったが、容態が悪化し、1872年6月2日に亡くなった。この真に忌まわしい「子殺し」のことを、それから34年も後の1906年に振り返って Twain は“I have always felt shame for treacherous morning's work and have not allowed myself to think of it when I could help.”<sup>35</sup>としたためている。

この事件のことを Twain は Howells にだけ打ち明け、妻 Olivia にも打ち明けなかったこと、そして、この事件発生から34年もの間、彼の心の奥に死ぬほどの慚愧の念として込み込んでいたということ、これら2つのことから判断すれば、この事件から僅か4年後に書き始められた作品 *Huckleberry Finn* に、この自らが犯した“Cruelty to Langdon”に対する自責の念が込め

られていないとは到底考えられないであろう。いやむしろ、この“Cruelty to Langdon”で罪悪感に苦しみ続けた Twain が、Dick Allbright の投身自殺に代るせめてもの贖罪として、“His Own Cruelty to Langdon”を特に織り込んだ *Huckleberry Finn* を作品化したと思われるのだ。

## む す び

ここまで“the raft episode”を *Huckleberry Finn* に復元すべしという側面に立って論じてきたが、この復元の可・否いずれの見解を採るにせよ、これから *Huckleberry Finn* 研究を進める場合、ぜひ心に留めておくべき点がある。それは Twain の作品は生憎なことに、いずれも定本なき定本である。*Huckleberry Finn* はその典型的な作品と言えよう。これが1885年1月から2月までアメリカで初めて *Century Magazine* の誌上に載った時など、その編集責任者 Richard Watson Gilder は大巾にカット、補正し、挙句、全体の4分の1にまで縮小してしまった<sup>36</sup>。それから最近になっては、この作品の5分の1にも相当する末尾12章の Phelps Farm の条りを削除すべきだという見解も出て、論議を呼んだことは記憶に新しい。

そこで今後 *Huckleberry Finn* 研究を進めていく上で重要なことは、「書かれていること」もさることながら、それと同時に、「書かれていないこと」にも鋭い注意を払うことが必要である。作者の元の原稿が周囲の力で止むなく削除に追い込まれた部分、極端な補正を強いられた部分、とくに“I-story”に仕立てられたために陰に沈んで見えなくなっている重大な面、などを可能な限り浮かび上がらせることによって、この古典の真価は初めて光を放つことになろう。

この小論は1986年9月20日、日本アメリカ文学会関西支部例会において発表したものに改題、加筆、補正を加えたものである。

注

- 1 “the raft episode” の呼称は Twain 自らが用いたもの。他に “the raft chapter”, “the raft passage”, “the raftsmen passage” がある。
- 2 発刊100周年を機に “the raft episode” を第16章に復元したテキストは次の通りである。Mark Twain, *Adventures of Huckleberry Finn*, Designed & Illustrated by Barry Moser; Foreword by Henry N. Smith (Berkeley: University of California Press, 1985); W. Blair & V. Fischer (ed.), Mark Twain, *Adventures of Huckleberry Finn* (Berkeley: University of California Press, 1985); C. Neider (ed.), *Adventures of Huckleberry Finn* (New York: Doubleday & Company, Inc., 1985) など。日本では、拙編注 *Adventures of Huckleberry Finn* (東京: 開文社, 1986) がある。
- 3 *Mark Twain's Burlesque Patterns* (Dallas: Southern Methodist University Press, 1960) の著者 Franklin R. Rogers 教授もこの慎重論者である。
- 4 “the raft episode” 削減の理由・経緯については、Peter G. Beidler, “The Raft Episode in *Huckleberry Finn*,” *Modern Fiction Studies*, Vol. 14, No. 1 (1968) が詳しい。
- 5 M. Twain, *Life on the Mississippi* (New York: Harper & Brothers, 1906), p. 31.
- 6 *Ibid.*
- 7 *Ibid.*
- 8 Mark Twain Papers, University of California, Berkeley.
- 9 S. C. Webster (ed.), *Mark Twain: Business Man* (Boston: Little, Brown & Co., 1946), pp. 249-250.
- 10 H. Hill (ed.), *Mark Twain's Letters To His Publishers 1867-1894* (Berkeley: University of California Press, 1967), p. 173. 次の文面でその指示をした。  
 Keep it diligently in mind that we don't issue till we have made a *big sale*. Bliss never issued with less than 43,000 orders on hand, except in one instance—and it usually took him 5 or 6 months' canvassing to get them.  
 Get at your canvassing early, and drive it with all your might, with the intent and purpose of issuing on the 10th (or 15th) of next December (the best time in the year to tumble a big pile into the trade)—but if we haven't 40,000 orders then, we simply postpone publication till we've *got* them.
- 11 *Ibid.*
- 12 B. DeVoto (ed.), *Adventures of Huckleberry Finn* (New York: The Limited Editions Club, 1942). DeVoto はこの Introduction の中で、この episode 復元についての並々ならない意欲を次のように述べている。

I have done something which many students of American literature have wanted to do, and for which I hope the choleric ghost of Mark Twain will grant me absolution: I have restored the chapter which Mark ripped out of the manuscript and inserted in *Life on the Mississippi*. At one period in the composition of *Huckleberry Finn* he intended to restore it and he must have had his reasons for not doing so, but he does not tell us what they were. . . . At any rate, I restore it here and perpare to abide the anger of purists and idolators.

- 13 B. DeVoto (ed.), *The Portable Mark Twain* (New York: The Viking Press, 1946)
- 14 M. Twain, *op. cit.*, p. 31.
- 15 “baby & barrel”とはTwainの鉛筆でのこの作品メモの一つ。“the raft episode”を指すという。B. DeVoto, *Mark Twain at Work* (Cambridge: Harvard University Press, 1942), pp. 71-72. を参照のこと。
- 16 M. Twain, *Adventures of Huckleberry Finn* (Berkeley: University of California Press, 1985), p. 121.
- 17 “A Cruel Wife”の名称以外に“An Old Woman’s Story” (West Virginia), “The Wife of Kelso” (Scotland), “The Wily Auld Carle” (Scotland), “The Old Woman of Slapsadam” (Ohio), “Johnny Sands”, “There Was An Old Woman In London” (Wisconsin), “Old Woman of Dover” (Maine), “Old Woman of London” (Kentucky), “The Old Woman’s Blind Husband” (North Carolina), “There Was An Old Woman” (Missouri) などがある。次のM.P. Hearnの書によれば、このfolk-balladはTwainの愛唱歌で、彼の未完の劇とか、*The Prince and the Pauper* (1881)にも使ったという。
- 18 M. P. Hearn (ed.), *The Annotated Huckleberry Finn* (New York: Clarkson N. Potter, Inc., 1981), p. 365.
- 19 *Ibid.*
- 20 M. Twain, *Adventures of Huckleberry Finn*, p. 136.
- 21 K. S. Lynn, *Mark Twain’s and Southwestern Humor* (Boston: Little, Brown & Co., 1959), p. 213.
- 22 *Ibid.*
- 23 『旧約聖書』(Exodus 2:3)
- 24 F. Anderson (ed.), *Selected Mark Twain-Howells Letters* (New York: Atheneum, 1968), pp. 48-49.

- 25 Notebook 35 (July 7, 1902)
- 26 K. S. Lynn, *op. cit.*, p. 212.
- 27 M. Twain, *Life on the Mississippi*, p. 31.
- 28 M. Twain, *Adventures of Huckleberry Finn*, p. 5.
- 29 K. S. Lynn, *op. cit.*, p. 208.
- 30 『旧約聖書』(Genesis 6:5-13)
- 31 F. Anderson (ed.), *op. cit.*, p. 75.
- 32 L. Gordon, “Single Mothers and Child Neglect, 1880-1920”, (*American Quarterly*, Vol. 37, No. 2, Summer 1985, pp. 173-192.
- 33 J. Kaplan, *Mr. Clemens and Mark Twain* (New York: Simon & Schuster, 1966), p. 149.
- 34 *Ibid.*
- 35 *Ibid.* ここで特に Mrs. James T. Fields が述べた “his (Twain's) whole life was one long apology.” の言葉で “the death of his infant son Landon” について Twain がいかに強く自責の念に苦しめつづけたかがよくわかる。
- 36 A. L. Scott, “The *Century Magazine* Edits *Huckleberry Finn*, 1884-1885,” *American Literature*, Vol. 27, No. 3 (Nov., 1955).

Synopsis

The New Edition of *Adventures  
of Huckleberry Finn*

—the significance of “the raft episode”—

Yorimasa Nasu

“The raft episode” is the first episode from “Huckleberry Finn” to appear in print, and the last one of *Huckleberry Finn* to be printed as a part of the novel.

Kenneth S. Lynn asserted rightly that it is “an episode of extraordinary richness, of great beauty and humor which takes us to the heart of the novel.” Indeed, the episode, rather than being an adventure unconnected with what goes before or comes afterwards, is the focus of the novel. It concerns Huck’s adventure of swimming over to a huge raft seen in the distance and gathering the information of his whereabouts by eavesdropping. Huck climbs on board without being noticed, and listens to the folk-song, “A Cruel Wife,” sung by a rafter, the colossal boasting and brutal fights of the raftsmen, and the story of Dick Allbright’s baby. At last when Huck is discovered, he is jokingly identifying with the dead baby, killed and buried in a barrel. Here Twain, in effect, makes us notice that Dick Allbright’s cruelty to his own baby mirrors the situation of Huck scared and nearly killed by Pap Finn. Both boys, having died, really or seemingly, of the violence of their own fathers, have come alive again in the flowing waters of the great

Mississippi. Both are “alone and naked” under the cold eyes of white grown-ups.

In short, “the raft episode” gives us an important clue to the question, what the theme of *Huckleberry Finn* is. With the episode restored after the second paragraph of chapter 16, the “*New Huckleberry Finn*” is a novel dealing with the white men’s cruelty to an orphan and his rebellious flight for life.

The plausibility of such an interpretation is supported by Twain’s inner and outer problems caused in the 1870s, when he set about writing *Huckleberry Finn*. The 1870s brought a marked increase in concern about “child neglect” and “cruelty to children.” Against that deplorable condition an organized campaign arose during the period; in 1878 the MSPCC (Massachusetts Society for Prevention of Cruelty to Children) was established. Afterwards there were thirty-four such societies in the United States. Laws prescribed procedures and penalties in cases of “child neglect” and “cruelty to children.”

And, June 2, 1870, Twain’s only son Langdon died. For this tragical event Twain felt so deeply responsible, saying, “Yes, I killed him.” He kept on blaming himself for mistreatment of Langdon in a Spring morning when he took the son out for an airing. Looking back on that carriage ride with the sick and feeble son, Twain wrote in 1906: “I have always felt shame for that treacherous morning’s work.” Then I am going on the assumption that Twain, a lifelong guilt seeker, recognized himself as “a cruel Dick Allbright”, and wrote a confession novel of his own crime in the book of *Huckleberry Finn*.